

新渡戸稲造とハリス夫妻

2012年2月1日で遺愛は創基138周年、創立130周年を迎えました。創基・創立に深く関わったハリス夫妻と新渡戸稲造との関係について少し紹介します。

新渡戸稲造は岩手県出身で、『武士道』という本を英語で書き、日本人の精神を世界に紹介し、戦前の国際連盟の次長も務めた方です。その際にはキュリー夫人やアインシュタインを誘い、ユネスコの前身にあたる「知的協力国際委員会」を作りました。

稲造は北海道大学の前身である札幌農学校の2期生として内村鑑三とともに入学します。夜に寮に着くのですが、誰も玄関に出迎いに来ません。げげんに思うと、1期生はハリス氏と聖書研究会の時間を持っていたのでした。札幌農学校の礎を築いたのは「ボーイズビーアンビシャス」で有名なクラーク博士です。クラーク博士は札幌農学校にわずか9ヶ月しかいなかったのですが、当時の1期生に多大な影響を与えました。そのクラーク博士がアメリカに帰国する際に、函館のハリス夫妻のところに訪ねてきて、「学生を宜しく」とお願いしたそうです。それでハリス氏は毎月のように札幌に出かけ、英語を教えると共にキリスト教を伝え、札幌農学校の1・2期生に洗礼を受けました。

稲造は札幌農学校卒業後、北海道開拓使御用掛として北海道開発の仕事に従事するのですが、先輩や友人が留学したり東大に進学したりしたので、あせりと寂しさをおぼえ、東大に進学することにしました。その時の面接試験で稲造は「私は将来、日本と欧米をつなぐ太平洋の橋になりたい」という有名な言葉を述べました。入学を許可され、希望をもって東大に入学した稲造でしたが、当時の学問レベルは札幌農学校の方が上で、東大に失望し、次にアメリカ留学を目指します。

実際に留学するのですが、その際に最初に行ったのが、ペンシルバニア州のミートビルという町にあるハリス夫人の実家でした。右も左もわからないなかで、頼りにしたのがハリス夫人だったのです。稲造だけでなく、内村鑑三も留学の際には、ハリス夫人の実家にまづ行っています。内村鑑三は在米中にハリス夫人に色々相談にのってもらい、就職先まで紹介されています。

稲造は札幌農学校時代から躁鬱病の傾向がでてきて苦しんでいたのですが、イギリスのトーマス・カーライルという人の本を通じてのりこえていきます。カーライルについてはアメリカの雑誌で知り、著書をぜひ読みたいと思い探しまわるのですが、当時の日本の大学や本屋にはありませんでした。

ハリス氏がアメリカに帰るとい話を聞き、別れの挨拶にハリス宅に伺ったところ、探していたカーライルの本があり、譲り受けました。『サーター・リサータス』という本でした。稲造はこの本を生涯の間に30回以上読んだそうです。稲造は後に、カーライルがいなかったら生きていなかったかもしれないと述懐しています。しかしそれ以前に、ハリス夫妻がいなければ間違いなく、稲造の人生は違ったものになっていたと思います。



ハリス夫妻

2012年2月7日